



ペドロ・メイヤー

ウィルギリウス

ミラマール・コレクション

ミラマール・コレクション

60年以上にわたる歩みと、100万点を超える写真アーカイブを背景に、ペドロ・メイヤーは本作を通じて、多様な物語を共有するという課題に挑んでいる。これらの物語は、彼の写真家としての視線を示すだけでなく、長いキャリアを通じて培われた同業者としての活動の本質的な一部をも物語っている。

ミラマール・コレクションは、自伝的かつ回顧的な集成であり、41巻を超える構成によって、1950年代から最新の人工知能技術に至るまで、彼の写真表現の発展を記録している。

ウィルギリウス

この書物は、1308年から1320年にかけてダンテ・アリギエーリによって著された『神曲』のように、数世紀をさかのぼる物語にその源を持っている。地獄を旅するダンテを導いたウィルギリウスは、ここでは小さなネズミ、あるいは鶏、牛、サギ、ウサギといった仲間たちの姿で現れ、メイヤーの写真世界をめぐる旅に私たちを伴ってくれる。

それらのイメージは数々の箴言を映し出し、まるで紀元前6世紀のイソップ寓話のように、現代の生を考えさせる契機となる。こうして過去と未来は、写真という表現手段を介して、常に動き続けるダイナミックな現在に交差し、融合していく。

法的事項(レガールレス)

編集母体

ペドロ・メイヤー財団 A.C.

コレクション調整

マリソル・モリーナ

ペドロ・メイヤー・アーカイブ

エレナ・ロサレス

書籍編集 / 画像ポストプロダクション

ペドロ・メイヤー

アレクシス・オルティス

テキスト執筆

ペドロ・メイヤー

アレハンドロ・ゼンケル

文体校正

テレサ・マルティネス

編集監修

バプロ・メイヤー

フリオ・メイヤー

印刷監修

マヌエル・ガルシア

編集デザイン

アレクシス・オルティス

カルロス・メンドーサ

制作アシスタント
ソフィア・アッシェントルupp
ルス・バステン
サラ・エスクリバ
ニグテ・ゲレーロ

© ペドロ・メイヤー, 2025
www.pedromeyer.com

本書の内容はいかなる形式や手段(アナログ・デジタルを問わず)においても、著作権者またはその相続人による事前の書面許可なしに複製することはできません。本書にはAIで生成された画像が含まれており、Mac Studio M3 にて制作されたものです。

メキシコシティ・コヨアカンにて編集
メキシコ・オアハカにて印刷

ミラマール・コレクション
ISBN: 978-607-29-7238-4

ウィルギリウス(Virgilio)
ISBN: 979-8-9996765-0-4

QRコード: ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、日本語への翻訳版を参照可能。

私の友人、アウグスト(ティト)・モンテロッソ(1921–2003)へ。
彼から「簡潔であること」を学んだ。

本書に収められた各ページでは、読者は「最初の日付」によるオリジナル写真と、「二度目の日付」に示されたAIによる介入写真とを、対比しながら味わうことができる。

「未来は、もはやかつての未来ではない。」
—ポール・ヴァレリー

「人生における最大の喜びは、人々が『できない』と言ったことをやり遂げることだ。」
—ウォルター・ベイジット

「生き残るのは最も強い種でも、最も賢い種でもない。
変化に最もうまく対応できる種である。」
—チャールズ・ダーウィン

箴言とネズミ—時を超えた文化的つながり、イメージ、そしてAI
ペドロ・メイヤー

太古の昔から、箴言は人類の経験という広大な暗闇を照らす灯台のような存在であった。短くも記憶に残るこれらの言葉は、普遍的な真理を凝縮し、世代から世代へと伝えられてきた。アウグスト・モンテロッソはこう言った——「私は現実には生きている。しかし現実には存在しない。」友人ティトが残した文学的遺産は、その鋭さ、簡潔さ、そして深みゆえに、いまなお輝きを放っている。

彼は複雑な思想を簡潔に表現する術に長け、ユーモアや皮肉をもって人間の在り方を批評した。そのため、彼の箴言や掌編小説は単なる娯楽を超え、人生や世界を洞察する窓口となっている。同じように、写真という視覚的な言語が、一枚のイメージを俳句や文学的箴言のように変換し、私の人生に交差する。

同時に、私の物語に登場するネズミやその仲間たち——世界の片隅を静かに駆け抜ける小さな存在——は、古今東西の文化において象徴的な意味を担ってきた。そこに人工知能(AI)が新たな道具として加わる。「生き残るのは最も強い種でも、最も賢い種でもなく、変化に最もうまく対応できる種だ」とダーウィンは語った。この強力な箴言は、文化的な絆を拡張する指針であり、デジタル写真はその視覚的な補強手段となる。

箴言は、古代ギリシャから古代中国に至るまで、さまざまな文化で生まれ、知恵と観察の閃光を放ってきた。「汝自身を知れ」とソクラテスが説いたように。まさに自己探求と自覚を四文字で表現している。モンテロッソが言った「文章を書く技術とは、少ない言葉で多くを語ることだ」もまた、その精神を映す。

これらの言葉が時を超えて生き続けるのは、人類共通の経験を語り、複雑な世界を記憶に残りやすい形で提示するからである。ネズミもまた神話や文学、民間伝承に繰り返し登場し、知恵・謙虚さ・生存力を象徴してきた。中国神話では、ネズミは十二支の最初の動物であり、俊敏さと適応力を示す。イソップ寓話に登場する小さなネズミも、人間性や生活に関する道徳を伝えてきた。

イタリアの人気キャラクター「トッポ・ジージョ」、世界中で親しまれる「ミッキーマウス」「ミニーマウス」、そしてアート・スピーゲルマンの『マウス』に描かれる深遠なテーマもまた、ネズミが強力なメタファーとなる事例である。

私は過去2年間にわたり、200点ほどのネズミの写真を撮影した。そして自問した——なぜこれらを作るのか。その答えは夢の中に現れた。幼い頃、母が私に語ってくれた小さなネズミ「モイシエレ」。彼は私を励まし導いてくれる存在だった。そして80年の時を経て、デジタル時代に更新された助言とともに、彼は再び私のもとに現れた。

ネズミをめぐる箴言は、日常や人間性に関する観察を映す。「最も小さなネズミでさえ未来の流れを変えることができる」という言葉のように。こうした箴言は、儚さと力強さ、謙虚さと知恵という両義性を体現している。AIは私に新しい物語世界を開き、必要な場所に特定の形や色を持つネズミを出現させることを可能にした。私の「ネズミ写真」の探究は、1977年にアレハンドロ・ホドロフスキーと共に『スセソス』誌の表紙を撮影した頃から始まっていた。

生きたネズミで撮影するのも、AIで生成するのも、同じくらいの「幸運」を必要とする。どちらも動物の脳、そして私が扱うコンピューターの脳に「クリック」する必要があるのだ。AIはイメージを提案するだけでなく、言葉も生み出す。AI言語モデルは、新しい箴言や物語を紡ぎ、伝統的な知恵を革新的な形で取り込むことができる。

こうして箴言・写真・語り手はひとつの舞台に結びつき、ページやスクリーンを小さな劇場のように変える。大聖堂に佇む孤独なネズミの写真は、それだけで物語を語る。現代の技術により強化されたイメージは、普遍的な人間経験を示し、文字の知恵と創造的解釈の架け橋となる。

結論として、箴言とネズミは人類文化において常に重要な存在であった。AI時代において、私たちは新たな道具を得て、それらを探求し拡張することができる。古きものと新しきもの、知恵とテクノロジーが交差する地点に、無限の可能性が広がっている。イレーネ・バジェホの近著『私たちについて誰かが語った』(2023)もまた、この旅に文学的な光を添えている。

「人の偉大さは年齢で測られるのではなく、
身の回りの小さな事柄にどれだけ心を注げるかで決まる。」
—無名

モイシエレが贈る: ウィルギリウス I

私、ネズミが語る——量子的な案内人
アレハンドロ・ゼンケル

さあ、近づいてみてほしい。この空気に漂う振動を感じるだろうか？それは、説明されることを拒む本の鼓動だ。本質において「紹介」を拒絶する本。その名は『ウィルギリウス』。

ダンテを地獄の輪廻へと導いた詩人ウィルギリウスを覚えているだろうか。決して容易ではない役割だった。ペドロがこの旅にその名を与えたとき、私は彼の視線を感じ、自分の役割を悟った。影に生きる小さな存在——私という一匹のネズミが、今宵の案内人なのだ。

私に天国や地獄を約束する力はない。だが、もっと複雑な迷宮への案内ならできる。ペドロ・メイヤーの心という可能性の原野を巡る旅。

彼の作品を「解説」するつもりはない。解説とは、なぜ笑えるのかを理解するために冗談を解剖するようなものだ。魔法を失わせてしまう。電子に「ここに留まれ」と迫るようなものでもある。その本性は、私と同じく「複数の場所に同時に存在すること」なのだから。

この瞬間、私はどこにいるのか。ここで語りかけているのか。それともスクリーンに投影された像なのか。触れられていない本のページの上か。あるいは80年前、母が語った物語の中の声か。それともアルゴリズムが生んだ幽霊、Adobe Firefly という名の仕掛けか。

答えは——すべて、だ。私は重ね合わせの状態にある量子的な存在。語り手であり、登場人物であり、記憶である私のどの側面に焦点を合わせるかによって、あなたの目の前に「収束」する。

この本もまた同じだ。読み手が開くまでは、無限の可能性が雲のように漂っている。ペドロは生涯をかけて写真もまた同じ原理に従うことを理解してきた。だから私の務めは説明ではなく、案内だ。この本を一つの解釈に閉じ込めることは、その本質を裏切ることになる。観察者——つまり、あなたがそれを決めるのだ。

「私は惨めさ全体ではなく、なお残る美しさを見つめる。」
—アンネ・フランク

「重要なのは、何が起きるかではなく、
それにどう応じるかだ。」
—エピクテトス

「6歳のとき、兄弟がいなかった私に、母が創り出したネズミ“モイシェレ”が、あらゆる冒険の仲間となり、年月を経て“ウィルギリウス”へと姿を変えた。」
—ペドロ・メイヤー

「木と人間は同じ秘密を分かち合っている。——脆さの中に潜む力だ。」
—無名

「そばかすは顔に落ちた星。
ネズミはその星を見つめる天文学者のひとり。」
—ペドロ・メイヤー

「宇宙は大時計にすぎない。だが、その時計職人はいない。」
—ピエール＝シモン・ラプラス

「人生の目的とは、“目的ある人生”そのものである。」
—ロバート・バーン

「私のひ孫たちはまだ鶏を知らない。実のところ、私もだ。」
—ペドロ・メイヤー

「年齢に関わらず、ウサギを追いかけることは常に面白い冒険を約束してくれる。」
—無名

「動物界でも人生でも、ラベルはしばしば現実に覆される。」
—ペドロ・メイヤー

「人生で最大の過ちは、過ちを恐れ続けることだ。」
—エルバート・ハバード

「待合室では、誰もが順番を待つ。」
—ペドロ・メイヤー

「愛とは見るものではなく、感じるもの—とりわけ彼女がそばにいるとき。」
—パブロ・ネルーダ

「人生という迷宮において、好奇心は必ず道を見つける。」
—無名

「誰が言った？ ここでは何も起きなかったと。」
—ペドロ・メイヤー

「自分を笑えぬ人間は、孤独に囚われる。」
—アウグスト(テイト)・モンテロッソ

「忍耐は苦い根を持つ木だが、その実は甘美である。」
—ベルシヤの諺

「歴史のギリシャのアトランティス像は、あるとき突然、ネズミをも支えていた。」
—ペドロ・メイヤー

「エルモもネズミも英語は話さない。
だが“そこにいる”という代償を理解している。」
—ペドロ・メイヤー

「ここに生きる全ての人のことを思えば、私の人生は到底足りない。」
—ペドロ・メイヤー

「花を見つめるネズミは、走り去る人間よりも美を知っている。」
—ペドロ・メイヤー

モイシエレが贈る: ウィルギリウス II

決定的瞬間から熟慮の瞬間へ(宇宙の選択)
アレハンドロ・ゼンケル

20世紀の写真家は「決定的瞬間」の狩人であった。
カメラを銃のように携え、街を駆け抜け、汗を流し、光と構図の神々が一瞬だけ微笑んでくれることを待ち望んでいた。彼らはただひとつの宇宙を信じ、その最も完璧な表れを切り取ることを使命とした。

だがペドロは、その役割に決して安住しなかった。彼は常に「狩人」ではなく「錬金術師」だったのだ。暗室やMacの画面こそが彼の実験室であり、そこは捕らえる場ではなく、創り出す場であった。

彼の作品は、決定的瞬間の専制を解体するための、長く魅惑的な旅である。それは「決定的瞬間」から「熟慮の瞬間」への旅路だ。

熟慮の瞬間とは、現実の量子的な本質を認める行為である。ペドロは「シャッターを切る瞬間」、宇宙を記録しているのではなく、その中からひとつを選び取っていると理解している。無数に存在する可能性のなかから、自らの選択によってひとつを収束させ、現実として呼び込むのだ。彼の写真は「これがあつた」とは言わない。「無限にあり得たこと」のなかから、私はこれを選んだ」と語るのである。

しかし、彼の錬金術はさらに先へ進む。デジタルの実験室で彼は時を超える旅人となる。1984年に収束させた写真に、2024年にしか呼び出せない要素を融合させる。異なる二つの宇宙、二つの現実の崩壊点を、一つの平面に同居させるのだ。それは制御された「デコヒーレンス」の行為——オリジナルの純粋性を汚し、新たな、より複雑で不安定、そしてより刺激的なシステムを創り出す試みである。

彼の仕事は「かつてあつたもの」を示すことではない。
「あり得たすべて」を探求し、さらに大胆にも「決してあり得なかったもの」を想像力の中に呼び込むことにある。彼を魅了するのは過去の考古学ではなく、未来の建築——新しい現実の設計図なのだ。

沈黙は決して裏切らぬ友である。」
—孔子

「自尊心に基づいて“自分はすべてに値する”と信じる健全な確信と、
傲慢にも“すべては自分に値する”と信じる思い上がりには、大きな違いがある。」
—ペドロ・メイヤー

「共感とは、“コウモリであること”を想像することだ。」
—ペドロ・メイヤー

「神聖視される牛も崇められるべきだが、同時に疑問を投げかけられるべきである。」
—無名

「賢者は意見を変えることができる。
愚者は決して変えない。」
—イマヌエル・カント

「私たちは何世紀にもわたり、同じようにあり得ない物語を聞かされ続けてきた。」
—ペドロ・メイヤー

「ホテルの窓から、ネズミは広大な都市を眺める。
それはエドワード・ホッパーのキャンパスのように、
ひとつひとつの光が孤独のため息であり、
ひとつひとつの影が語られぬ物語の約束である。」
—ペドロ・メイヤー

「大聖堂の神聖な静寂の中では、最も小さなネズミでさえ永遠の声を聞くことができる。」
—ペドロ・メイヤー

「未来は、今日あなたが何をするかにかかっている。」
—マハトマ・ガンディー

「この人生では、一段ずつ階段を上る許しを自分に与えねばならない。」
—ペドロ・メイヤー

「密林ではあなたは王であろう。だが、この檻から抜け出せるのは私だけだ。」
—ペドロ・メイヤー

「シダは地球上で最も古い植物であり、その歴史は3億年に及ぶ。」
—無名

「不確実性は私たちを快適な領域から押し出し、成長へと導く。」
—無名

「創造性とは、楽しんでいる知性である。」
—アルベルト・アインシュタイン

「彫刻家のアトリエにいるネズミは、形が混沌から生まれ、
美が忍耐から生まれることを知っている。」
—ペドロ・メイヤー

「瞑想を妨げられないという芸術。」
—無名

「静かな心は、継ぎ目のないスクリーンのようなもの。
訪れるものを受け入れ、制御不能なものにも壊されない。」
—ペドロ・メイヤー

「正確さと秩序こそが、科学的進歩の魂である。」
—マリー・キュリー

「虚栄心は唯一の情念であり、美德の仮面をかぶる。」
—アウグスト(テイト)・モンテロツソ

「都会の喧騒と群衆のせわしない流れの中で、
一匹の孤独なネズミが教えてくれる—混沌の中にも、自らの道を見つけ、順番を待つ空間はあるのだと。」
—ペドロ・メイヤー

「どんな仮面の裏にも、心の奥で芽生えつつある感情が潜んでいる。」
—無名

「五番街は豪華さと優雅さに輝く。
だがネズミたちは、簡素さの中にこそ価値を見いだす。」
—ペドロ・メイヤー

「ネズミがパン屑を見つけ、乞食が希望を見つける。
どちらも街に忘れられた場所で生き延びている。」
—ペドロ・メイヤー

「壊れた時計でさえ、一日に二度は正しい時刻を示す。」
—ペドロ・メイヤー

「タロットの星に導かれるネズミは、
常に影の間に道を見いだす。」
—無名

「私が最初に自分の名を目にしたのは、紀元前300年のイソップの物語だった。」
—無名

「ネズミたちは“死者の女王”カトリーナの隠された恐怖を暴き出す。」
—ペドロ・メイヤー

「私の前を歩かないでほしい。私はついて行かないかもしれない。
私の後ろを歩かないでほしい。私は導けないかもしれない。
ただ隣を歩いて、友でいてほしい。」
—アルベール・カミュ

「誰かと共に歩くときこそ、人は自分が誰であるかを思い出す。」
—ペドロ・メイヤー

「影の中で、ネズミとオレンジは小さな宇宙の“太陽と月”となる。」
—ペドロ・メイヤー

「タイムズスクエアの群衆が絶えず流れる中、
移民とネズミは共に進み、夢と希望を分かち合う。」
—ペドロ・メイヤー

「タイムズスクエアの中心で、若い観光客のカップルと彼らのピザの箱が、
好奇心いっぱいの二匹のネズミと意外な仲間意識を見いだす。」
—ペドロ・メイヤー

「盲目は“贈り物”だとボルヘスは言った。
『なぜ？』とネズミが尋ねる。」
—ペドロ・メイヤー

「科学は耳を澄まし、芸術はささやく。
聴診器と仮面は対極に見えるが、どちらも“見えぬもの”を読み解こうとしている。」
—ペドロ・メイヤー

「葉巻は時に、ただの葉巻にすぎない。」
—ジークムント・フロイト

「無知は知恵の母である。」
—ソクラテス

「目を覚ますと、恐竜はまだそこにいた。」
—アウグスト(ティト)・モンテロッソ

モイシエレが贈る: ウィルギリウス III

来たるべきイメージ(マルチバースへようこそ)
アレハンドロ・ゼンケル

こうして私たちは、この旅の終着点にたどり着いた。だが、良質な迷宮の出口は常に別の入り口でもある。ここから広がるのは、より大きな世界—私たちの現在、そして未来だ。

『ウィルギリウス』は写真の過去を語る書ではない。21世紀における「現実の本質」をめぐる思索なのだ。

ひとつのイメージが同時に複数の状態に存在し得るなら。
それが異なる時代・空間・作者の融合であり得るなら。
人間の意図とアルゴリズムの確率から生まれ得るなら—。

では「現実」とは何か。
「記憶」とは何か。
「真実」とは何か。

本書は答えを示さない。それは傲慢であり、退屈でもあるからだ。代わりに本書が差し出すのは、ひとつの訓練場である。マルチバースを航行するための安全な空間だ。そこでは私たちは、ひとつの真実、ひとつの物語に囚われる習性を手放すことを学ぶ。

不確実性を「空虚」としてではなく、「無限の自由」の場として受け入れることを。本書は優雅さとユーモアをもって、それを教えてくれる。

未来のイメージは量子的である。芸術作品はもはや固定的で神聖な対象ではなく、観察者によって活性化される可能性の場となる。そして、その観察者こそ—忘れてはならない—あなたなのだ。

それぞれの読者が、自らの視線、自らの物語、自らの解釈を通して、この本を唯一無二のかたちに結晶化させる。

私の役目はここで終わる。

私はモイシエレ—粒子であり波であり、記憶でありアルゴリズムである存在—再び重ね合わせの状態に戻り、次なる旅人が一瞬のあいだ私を現実にしてくれるのを待つ。

最後にこの思いを残そう。
複雑さを恐れないこと。
疑念を恐れないこと。

この新しい世界では、「確実さ」こそが檻である。
問いかけ、逆説、可能性——それこそが、私たちに残された唯一の自由なのだ。

略歴

ペドロ・メイヤー

若き日に写真家を志したが、当時は正式な学校が存在せず、独学で学んだ。
彼の歩みは、テクノロジーと視覚的な物語のあいだを行き来する不断の探究である。

彼は**「アルテ・フォトグラフィコ・グループ」**を創設し、最初のラテンアメリカ写真コロキウムを推進し、メキシコ写真評議会を設立した。

のちに彼は、写真を紹介するための世界初のインターネット・サイト「**ZoneZero**」を開設し、1,500人以上の作家の作品を公開した。

また、世界初の写真CD-ROM『**Recuerdo**のために撮る (Fotografía para recordar)』を制作し、回顧展『**Herejías** (異端)』は17か国60以上の美術館で開催された。

彼は ペドロ・メイヤー財団 と フォト・ミュゼオ・クアトロ・カミノス の創設者でもある。

2020年以降、彼は「ミラマール・コレクション」に取り組んでおり、60年に及ぶ作品を40冊以上の書物としてまとめ、イメージ・記憶・人生を、絶えず変容する時代において考察している。

アレクシス・オルティス

マルチディシプリナリーなビジュアル・アーティストであり、その活動の中心には「知覚」「想像力」「記憶」「領域」「アイデンティティ」「時空の概念」がある。

それらを軸に、私たちがいかに現実を構築するのかを問いかけるナラティブを生み出す。

彼の作品は国内で展示され、写真、ビデオアート、ビデオインスタレーション、音楽、テキスト(詩を含む)などを横断し、人間・テクノロジー・自然の交差点を探究している。

現在はペドロ・メイヤーと協働し、ミラマール・コレクションの編集者兼デザイナーを務めるほか、ペドロ・メイヤー・ギャラリーでのキュレーションや展示構成にも携わっている。

アレハンドロ・ゼンケル

編集者、翻訳家、写真家、そしてエッセイスト。

彼は熱意ある推進者として、多数のプロジェクトに関わってきた——**Solar Servicios Editoriales, Ediciones del Ermitaño**、国際的な書籍流通プラットフォーム **Librántida** など。

現在は **ILLAC (Instituto del Libro y la Lectura, A.C.)** を主宰し、言語・イメージ・テクノロジーの関係を探る文学的・視覚的・教育的な試みを推進している。

30冊以上の著作を持ち、その活動は職人的な編集からAIの活用に至るまで、多様な地平を横断している。

注・参考文献

「箴言とネズミ：時を超えた文化的つながり、イメージ、そしてAI」

1. モンテロッソ, アウグスト. *Obra completa*. ホセ・ルイス・ガルシア・バリエントス編. メキシコシティ: Editorial Seix Barral, 2000.
2. ダーウィン, チャールズ. 種の起源. G.C. ワルポール編. ロンドン: John Murray, 1859.
3. ソクラテス. 弁明. プラトン『全集』所収. ジョン・M・クーパー編. インディアナポリス: Hackett Publishing, 1997.
4. モンテロッソ, アウグスト. *Obra completa*. ホセ・ルイス・ガルシア・バリエントス編. メキシコシティ: Editorial Seix Barral, 2000.
5. ホドロフスキー, アレハンドロ. *Sucesos: Revista Mexicana de Cultura Visual*. Ediciones Sucesos, 1977.
6. バジエホ, イレーネ. *Alguien habló de nosotros*. バルセロナ: Editorial Tusquets, 2023.

脚注

- p.5: ヴァレリー, ポール. *Regards sur le monde actuel*. パリ: Gallimard, 1931.
- p.6: この言葉は一般的にウォルター・ベイジットに帰せられているが、彼の著作や演説の中に確認できる記録はない。ここではその人気と伝統的な関連性のため引用された。
- p.8: この言葉はダーウィン自身のもではなく、1963年にレオン・C・メギンソンがダーウィンの思想を経営学の文脈で意識したもの。広く流布しているためここに記載。
- p.15: 出典不明。
- p.16: エピクテトス. *Selections from the Discourses of Epictetus*. ジョージ・ロング訳. フィラデルフィア: H. Altemus, 1877.
- p.18: メイヤー, ペドロ. スタジオでの作業記録. ココアカン, メキシコシティ, 2024.
- p.21: ネルーダ, パブロ. 二十の愛の詩と絶望の歌. マドリード: Alianza Editorial, 1991.
- p.26, p.31, p.40, p.55, p.92, p.101, p.114-118: 出典不明。
- p.28: モンテロッソ, アウグスト. *Obras completas*. メキシコ: Editorial Joaquín Mortiz, 1985.
- p.33: ラプラス, ピエール=シモン. *Philosophical Essay on Probabilities*. フレデリック・ウィルソン訳. ニューヨーク: Dover Publications, 1995.
- p.34: バーン, ロバート. *The 2,548 Wittiest Things Anybody Ever Said*. ニューヨーク: HarperCollins, 1990.
- p.47: フランク, アンネ. アンネの日記. ロンドン: Longman, 1989.
- p.51: ハバード, エルバート. *The Note Book of Elbert Hubbard*. ニューヨーク: Roycrofters, 1927.

- p.56: 孔子. 論語. フアン・マヌエル・シフエンテス訳. マドリード: Ediciones Akal, 2006.
 - p.61: ガンディー, マハトマ. *Collected Works of Mahatma Gandhi*. Vol.10. ニューデリー: Publications Division, Government of India, 1965.
 - p.67: ペルシャの諺. 「La Mente es Maravillosa」編. ゲマ・サンチェス・クエバス監修. 2018年1月31日掲載.
 - p.69: *Madame Curie: A Biography*. ニューヨーク: Doubleday, 1937.
 - p.70: モンテロッソ, アウグスト. *La oveja negra y demás fábulas*. メキシコ: Editorial Joaquín Mortiz, 1969.
 - p.73: この引用はカントに帰せられることが多いが、主要著作に裏付けはない。
 - p.76: シダが3億年前から存在する最古の植物であるというのは一般的に受け入れられた生物学的事実だが、特定の著者には結びついていない。
 - p.78, p.80: 大衆的な起源のため作者不詳。
 - p.82: アインシュタインの言葉とされるが、文献的証拠はない。
 - p.121: このフロイトの言葉は逸話的なもので、出版物には現れない。
 - p.122: このカミュの言葉は彼の思想をよく表しているが、作品中にそのままの形では確認されない。
 - p.127: 一般的にソクラテスに帰されるが、プラトンの対話篇などには記録されていない。
 - p.128: モンテロッソ, アウグスト. *Obras completas (y otros cuentos)*. メキシコ: Editorial Joaquín Mortiz, 1959.
-

ミラマール・コレクション 今後の刊行予定

- アルゴリズム
- 自画像
- アバンダロ, 1971
- アフスコ地区
- キューバ, 1979–2009(全2巻)
- 此岸から彼岸へ
- 68年の只中で
- 世界劇場
- 記憶のために撮る
- ウエフウトラと他の町々
- イストリルコ・エル・グランデ
- ミシュテカ地方
- ラス・トルーチャス, ラサロ・カルデナス市
- 一日中続いた花火—改訂版
- サンディニスタ証言, 1978–1984
- エクアドル, 1982–2010
- ユマ, 1984–1989

さらに **23**タイトル が制作中。

ミラマール・コレクションの各タイトルに関する詳細情報を入手するには、**QR**コードをスキャンしてください。



<https://pedromeyer.com/es/miramar/>

このコレクションにご協力いただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。



著者の注記

本書に見られる誤りはすべて、私自身の責任である。
それらを完全に避けるための手段を私が十分に持ち合わせていないことを自覚している。

それでも、これらの本を世に送り出したいという願いは、誤りを恐れる気持ちよりも強い。

親愛なる読者をお願いしたい——完璧と最善の努力とのあいだにある、この繊細な均衡をどうか理解していただければ幸いである。

ペドロ・メイヤー財団 A.C. は著作権の保護を支持している。
著作権は創造性を育み、思想と知識の多様性を守り、自由な表現を促進し、生きた文化を支える。

この正規版をご購入いただき、著作権法を尊重して下さった読者に感謝申し上げます。
それは作者やクリエイターを支える行為であり、財団が文化作品を発信し続けることを可能にする。

本書に収められた写真の大部分は、ペドロ・メイヤー自身の作品である。

本書は 2025年9月、メキシコ・オアハカ州サンタ・マリア・デル・トウレにある Repro.Gráfica, S.C. の工房にて印刷された。

©『ウィルギリウス』ペドロ・メイヤー
初版: 2025年

本書の制作には、iPhone 14–15 Pro Max、Leica M・Q2・S・M11、Sony A1、Mac Studio Pro、MacBook Pro 2022、Adobe Photoshop v24.3.0、InDesign v19.5、Lightroom Classic v12.2.1、Topaz Suite、Nik Collection 6–7、Luminar 4、Dream by Wombo、Adobe Firefly、Ulysses App、Perplexity、そして Chat GPT 4 が使用された。

本版はクラシック・シリーズ200部、ギャラリー・シリーズ50部、コレクター・シリーズ50部の限定刷りで構成されている。

謹呈本番号: _____



PEDRO MEYER